

政子と頼朝

二卷

人

北條の息女政子姫

其妹 牧子姫

源 頼 朝

時———治承三年の春の午後

所———伊豆の國北條

(伊豆の國なる北條時政が館の庭園。

花咲き亂れ、柑子累々と垂る。胡蝶飛び、鶯啼く。治承三年の春或日の午後。

政子姫の妹牧子姫、石にもたれて頼朝よりの戀文を読み居る。無邪氣な其面には、一種の驚愕と嬌羞との色が浮んで居る。

柑子のしげみより政子姫が出来る。その聲音に驚いて牧子姫はその戀文を袂に隠す。

それを目ざとく見た政子姫は、わざと心づかぬ様に側へ来る。

牧子姫も心づかない體でじつと足下を見て居る。

政子と頼朝

蝶と鶯とは、此姉妹の心のたゞかひを知らぬ顔で、長閑に飛んだり啼いたりして居る。

政子 姫 (しばらくして) まあ、こんなところに何をして居たの。

牧子 姫 (初めて気がついたやうに) あら、お姉さま。

政子 さつきからここに居たの。

牧子 いゝえ。

政子 如何かしたんぢやなくつて。

牧子 いゝえ。

政子 でも、顔色が良くないやうよ。

牧子 (顔を撫で) さうでせうか。

政子 まだ昨夜の夢の事を考へて居るんぢやないこと。

牧子 いゝえ、夢はお姉さまに買つていたゞきましたから、わたしもう氣になんかして居りませんわ。

政子 左様! それなれば結構だけれど……これからもね、決して隠して立てなんかしないやうになさい

よ。わたし、どんな相談にでも乗りますからね。

牧子 (何やら探つたさうに) え。

政子 いくらわたしの方ばかり氣を揉んでも、おまへさんが祕密にして居たのでは、如何にもなりま

せんからね。阿母さまはわたしとは生さないうちでおありになつても、あんなに大事にして下さるんですから、わたし如何なにも、おまへさんの爲めに盡さなければなりませんからね。分つて、わたしのいふことが。

牧子 え。

(とは言つたものゝ、流石に戀文を出す譯にも行かない。政子の方は初めて氣のついた様に、牧子の袂に目をつける。)

政子 おや、これは何。

牧子 (袂の上に片方の袂を載せて) な、何でも無いのですわ。

(といふ中に政子は手早く其戀文を引出してしまふ。)

牧子 お姉さま、あら、いけません。

(政子は側の樹木を楯にして逃げる。牧子は涙ぐんで追ひかける。)

政子 (逃げながら) 隠し立てはしない約束ぢやないの。

牧子 でも、それは。

(政子は逃げながら、拾ひ讀みして、聲を上げて笑ひ出す。)

政子 ハ、、、ハ、ホ、、、ホ。

牧子 (愈よ涙ぐんで) お姉さま、返して下さいな。

政子 だつておまへさん……ハ、ハ、ハ、ハ。

牧子 (腹立しげに) 随分お人が悪いのね。何が、そんなにをかしいんでせう。

政子 だつて随分面白い事が書いてあるのですもの。誰？ こんな面白い手紙をよこした方は。

牧子 わたし知りませんわ。

政子 知らない。知らない人が、手紙をよこす筈はないでせう。

牧子 だつて、わたし眞實に知らないんですもの。

政子 だつて名が書いてあるぢや有りませんか。

牧子 (一寸返事に困つて) でも、わたしまだそこまでは讀んで見なかつたのですわ。

政子 (わぎと皮肉に) では、わたしが代つて見て上げませうね。「朝より」……「朝」……「朝」つて誰の事？

牧子 ……………

政子 牧子さん、『朝』つて誰なの。

牧子 わたし、眞實に知りませんわ。

政子 では、誰が此手紙をもつて來たの。

牧子

政子

.....  
〔急に何事か思ひ當つたやうに、其目は輝き出し、不快らしい陰がさつと其額をくもらせる〕あゝ、今しがた藤四郎盛長のやつが門から出て行つたと思つたら、あれは頼朝からの戀の使者だつたのね。道理でわたしの姿を見たら、こそく逃げて行つたわ。始終阿父さまの許へ来るあの男が、如何したのかと思つたら、まあ此文を持つて來たの。

牧子

〔額を赧らめて〕えゝ。

政子

〔腹立しげに〕えゝも無いものです。まあおまへさんは随分大膽な人ね。世の中から「世になし源氏」なんて侮辱されて居る、あの流人の頼朝などと交際して居るなんて。

牧子

あら、酷いわ、お姉さま。わたし全く見た事も無い人ですわ。

政子

ほんたうに。

牧子

えゝ。

政子

見た事もないのに戀文をよこすなんて、〔戀文を読んで見て〕成程、「まだ一度の逢瀬も候はねど……」とは書いてあるのね。あゝ、〔急に態度を變へて〕牧子さん、おまへさん、口惜くはない。

牧子

〔無邪氣に〕な、何がです。

政子

こんな侮辱をうけてさ。

牧子

侮辱を？

政子

ひどい侮辱ぢや有ませんか。まだまるで見た事も無い婦人に、こんな失敬なつけ文をするなんて。

牧子

左様いへば左様ですわね。

政子

(妹の腑甲斐ない態度に一層憤慨して) 左様ですともね。伊豆の女はみんな意志の弱い、無智なものだと思つて居るのか知ら。北條の娘を伊東の娘などと一緒にされて堪るものか。

牧子

伊東の娘つて、あの八重姫つて方の事？

政子

え、あの人を誘惑したのも、矢張この式だつたのでせう。

牧子

でもあの方は八重姫さんに棄てられたのだつて、その手紙の中に書いてありますよ。あの方を棄て、江間の四郎さんのところへお嫁に来るのですつて。

政子

まあ、何て嘘つきなものでせう。八重子さんの阿父さんに知れると、八重子さんも千鶴さんといふ息子さんも打ちやらかして、自分一人で又姪が小島へ逃げて來たんです。あんな色魔つてありません。

牧子

まあ怖い！

政子

(牧子が烈しく驚いて居るのを見て、稍得意になつて) わたしが早く氣がついたから好いやうなもの、全く危ない所でしたわねえ。

牧子 夢の祟りでは無いでせうか。

政子 それは如何が分らないけれど、兎に角何でもわたしに隠しだてをすると、靚面にかういふ事が起りますからねえ。

牧子 あら、隠したわけでは無いんですけれど。(政子に縋りつくやうにして) ねえ、お姉さま、わたし如何したらいいでせう。

政子 如何つて。

牧子 あの人が返事を聞きに参りましたら、如何したらいいでせう。

政子 (わざと太息をついて) 困りましたねえ。

牧子 お姉さま、後生ですから、如何かして下さいましな。

政子 では、詮方がありません。夢を買つてあけた序ですから、此手紙も買つて上げませう。

牧子 まあ、嬉しい事(思ひ直して)でも、その爲めにお姉さまの御迷惑になるやうな事が起りはしますまいか。

政子 大丈夫よ。起つたところでわたしなら自分で如何かしますわ。ではこの手紙の代りに、阿母さまから頂いた唐綾の小袖を上げませうね。

牧子 まあ、あんな立派なお品を。



政子 おまへさんに上げれば、阿母さまは却つてお悦びになるわ。

牧子 でもお姉さまはあの人に如何なさるお積り？

政子 それはね。(笑ひながら牧子に囁く。)

牧子 (目を丸くして) まあ、わたしの積りでお逢ひなさるの。

政子 え。さうして思ふさま侮辱してやるの。

牧子 でも、そんな事をなすつて、あとで困る様な事が起りませんか知ら。

政子 まあ、わたしに任せてお置きなさい。伊豆の女の眞實の價値を十分に思ひ知らせてやるから。

牧子 でも、彼方が色魔だとすると、何だか心配ですわね。

政子 では、わたしが誘惑されるだらうといふの。

牧子 あら、左様いふわけでは有りませんけれど。

政子 (後の方を見て) あら、あの木の下を通つて來るのが左様ぢや無くつて。

牧子 左様らしいわ。

政子 おまへさん、たしかに逢つた事が無いのね。

牧子 それは大丈夫よ。

政子 では、早く隠れて下さい。姉さんのつもりで威張つて行つて頂戴。(わぎと料をつくつて) では、お姉

なす、また後刻。

(牧子は笑ひながら上手へ去る。政子思はず微笑したが、やがて戀文を披けてきて種々なしぐさをして見る。

結局戀文を取り上げて、それを頬にすりつける。

頼朝は徐かに樹の間を分けて入つて来る。が、如何切り出したものかと、しばらく政子を見て居る。

政子も顔を見る機会に困つて、じつと立つて居る。

櫻の花は無心に散つて居る。

二人はしばらく心の中の闘争をつどけて居たが、たうとう頼朝が根まけをして手にして居た扇を落す。

政子は烈しく驚いたやうに、戀文を隠して二三歩あとずさる。

二人は顔を見合せる。しばらく間。

頼朝

あなたは牧子姫でいらつしやいますね。

政子

(わざと嬌羞を含んで) はあ、あなたは。

頼朝

わ、わたしですか。わたしはあなたのお手にもつて、居て下さる、其手紙の送り人です。世にも  
憐れな流人の頼朝です。

政子

まあ、あの頼……(と云ひかけて、戀文の名のところを見る)

頼朝

あなたはさぞ怒つて居らしたでせうね。

政子と頼朝

政子 (荷顔を見ずに) 何故です。

頼朝 あんまり厚皮しい、無禮な奴だと思つてゐらつしやるでせうね。

政子 わたし、そ、そんな事は思ひませんけれど……

頼朝 では、如何お思ひになつたのです。

政子 (恥かしさうに) あなた、なぶつて居らつしやるんでせう。

頼朝 そ、それは飛んでも無い事です、わたしは衷心から、あなたをお慕ひ申して居るんです。その手紙の一字一句は、悉くわたしの血と涙とで書いてあるのです。

政子 まあ、あんな事をおつしやつて、此字は墨で書いてあるぢや有りませんか。ちつとも赤くは有りませんわ。(わざと無邪氣らしくいふ。)

頼朝 (笑つて) そんなに揚足を取るものぢや有りません。兎に角わたしは一生懸命なのです。眞劍なのです。

政子 嘘ですわ。あなたは、わたしを一度も御覽になつた事は無いんぢや有りませんか。

頼朝 お目にかゝつた事はありませんけれど、しかしお噂は能くうかゞつて居ました。

政子 まあ、誰が、わたしの噂なんぞを。

頼朝 能く阿父さまのところへお使ひにまゐる盛長や、それから近ごろ御懇意にして居るお兄いさんな

どから。

政子 (ちよつと思ひ違へて) 兄から？

頼朝 お兄いさんでせう。あの義時さんは。

政子 (少し狼狽して) あ、そ、左様です。兄はさぞ悪口を申して居りましたでせう。

頼朝 如何して、お兄さんは何時もあなたの御自慢ばかりです。姉の政子はいやに伶俐ぶつて、それあ意地の悪い女だが、あれは又正反對に心のやさしい……(政子もさすがに苦笑する。それを頼朝は別の意味に解釋して) いや、あなたは大變にお姉さま思ひでるらつしやるさうですね。それにこんな事を申上げて、お心地を悪くしては濟みませんでしたね。わたしも他人の悪口をいふことは嫌ひな方ですが、お兄さんの仰有つた事を、つひ正直に申上げたのは大失策でした。

政子 そんなに云ひ譯なんかなくつても好うございますわ。どうせ姉は……

頼朝 いや、お姉さまの事はもう止ませう。兎に角お兄さんは、あなたほど女性らしい女性はないと云つておいでです。それに、わたしのところの盛長なども、こちらへ何ふ度毎に、あなたのお噂をして、まづ今の世の典型的な女性だとさへ尊敬して居ります。

政子 まあ、わたし如何致しませう。

頼朝 わたしがこんな失禮な事を爲る様になつたのも、實は二人の噂の爲なのです。わたしはたうとう

見ぬ戀にあこがれて、こんな冒険を敢てする事になつたのです。

政子　でも本人にお逢ひになつて、二度吃驚をなすつたでせう。これでは見ぬ戀もさめておしまひなすつたでせう。

頼朝

ところが思ひは彌増すばかりです。實は——正直に申上げますとね。盛長の奴の話では、御風采の方は……失禮ですが……御品性に比して、多少の遜色があるなどといふ事でしたが、如何して如何して、わたしは都に居た時代でも、あなたの様な美しいお方に、お目にかゝつた事は一度だつて有りません。成程伊豆は美人の産地で、既に一家の源三位頼政の北の臺となつた、菖蒲の前の如きも此近所の産れださうですが……

政子

それに伊東の八重子さんのやうなね。

頼朝

え、八重姫。あゝ、あの事はもう御承知なのですな。(少しく萎れて) いや、あんな關係で分れた女に對して、こんな事をいふと男らしくない奴と、おさけすみになるかも知れませんが、あなたとはまるで程度が違ひますよ。

政子

(稍輕蔑した調子で) まあ、あなたは却々お上手ね。

頼朝

(少しく憤慨した様子) お上手? あなたは此頼朝をそんな人間と思つて居らつしやるのですか。これから生涯の苦樂を偕にしていた、かうと思つて居るあなたに、心にも無い御世辭を使つて、其歡

心を買ふ必要が何處に在ります。わたしは自分の感じたまゝを、たゞ率直に申上げたのです。が、そんな事はどうでもいゝ。それよりは其手紙に對する御返事を伺ひませう。

政子

でははつきりお答へ申上げます。わたしは御免を蒙ります。(と、勝ち誇つたやうにいふ。)

頼朝

えつ。そ、それは何故です。

政子

わたしは伊東の八重子さんの様な目に逢ひたくはありませんからね。

頼朝

わたしがあの人に何をしたといふのです。

政子

御自分の身體の危険ばかりおそれて、妻も小兒もはうり出して、逃げ出してしまつたのは何人でしたかね。

頼朝

(いよく忿然として) ぞ、それは違ふ。小兒は不意に殺されてしまつたのです。女は一緒に逃げやうと云つても承知をして呉なかつたのです。いや、それどころか女は父に壓迫されると、また他へ嫁に行かうといふのです。だから今日になつて見ると、わたしの方が棄てられた形です。併しわたしはそれを残念だとは思ひません。伊東一家から棄てられた事は、わたしの爲めには寧ろ幸福だったのでせう。あの人たちに何時までも好意をもたれて居たら、あなたといふ理想の美人に、如斯くしてお目にかゝる機會は無かつたでせうからね。

政子

(顔をしがめて、吐き出す様に) 色魔ツ!

頼朝 (驚いて) えつ、何、何ですつて。

政子 強ひて歡心を買ふ必要が無いと云つて居る口の下から、もうそんな心にも無いお世辭を使つて居るぢや有りませんか。だから世間ではあなたを色魔だと云つておそれて居るのです。

頼朝 (急に笑ひ出して) わたしが色魔ですかね。成程、正直に心の思ふまゝを喋舌る人間を色魔といふのですかね。それならわたしは色魔中の色魔に相違ありません。併しそれは別問題です。それよりはわたしの希望に對する御快諾の語を伺ひませう。

政子 (少し力抜けがしながら) 兎に角わたしの父もなか／＼頑固ですから、八重子さんの阿父さんと同じ様な事を爲ないとも限りませんからね。

頼朝 (冷然として) いや、それなら御心配に及びません。

政子 如何してゝす。

頼朝 あなたは今の阿母さまの眞實の御嬢さんですね。たしか左様でしたね。

政子 え、左様です。

頼朝 ところが八重姫の阿母は、あの人とは生さぬ仲だつたのです、だから繼母どのはわたしの關係を烈く伊東入道にたきつけたものです。而して結果はあの騒ぎになつたのです。併し今度の場合では、わたしがお姉さんと妙な關係にでもなつたらいざ知らず。あなたとならば阿父さんも喜んで好意を

表して下さいよ。は、は、は。

政子

(胸をでも刺されたやうに、急に顔色を變へて) まあ、まあ、あなたはそれで、わたしよりはずつと美しい(と、云ひさして流石に躊躇したが、勇氣を鼓して語をつづける) すつと怜悯な姉には目も呉れないで、妹のわたしに白羽の矢をお立てになつたのですね。

頼朝

(少し狼狽して) いや、決してそんな……

政子

(疊みかけて) 口の先では、生涯の苦樂を偕にする妻を求めらるやうな事を仰有つても、心の中では將來の保護をして呉れる親を探して居らつしやるのですね。

頼朝

(愈よ敗亡して) と、とんでも無い……

政子

伊東の八重子さんと結婚しやうとしたのも、彼方に愛情があつたのでは無くて、入道祐親といふ阿父さんの助けを受けたかつた爲めなのでせう。わたしにしても北條時政といふ父が無かつたら、あなたは見向いても見なかつたでせう。ね、頼朝さん、北條の娘はみんなお轉婆ですからね、そんな結婚政略の犠牲になる様な、薄弱な意志をもつては居りませんよ。

頼朝

(尙辭解しやうとして) しかし、わたしは……

政子

男らしくも無い。いつまでぐづく云つて居るのです。もう直に日が暮れます。さつさと御歸んなさい。



頼朝

(烈しく威壓されたやうに、しばらくは黙然として政子の顔を打成つて居たが、やがて萎れ返つて) いや、では詮方が有りません、御暇致しませう。

(力なげに去りかける。政子は痛快さうに冷笑を含んで見送る。しばらく間。やがて頼朝は急に踵を回して政子の方へ進み寄る。)

政子

如何なすつたの。

頼朝

その手紙を返していたゞきませう。

政子

(冷笑して) 成程ね、こんな證據が残つて居ては、あなたの生涯の恥辱ですわね。

(頼朝に手紙を渡す。)

頼朝

(前とは打つて變つた一種の威嚴をもつて) 左様です。こんなものでも天下を取つた時の邪魔になるといけませんからね。

(さつさと立去らうとする。と、政子は此語に胸を打たれたやうな感じがしてわれにもあらず後を追ふ様に近寄つて)

政子

な、何ですつて。

頼朝

頼朝の心はあなたなんぞには分りませんよ。(獨語のやうに) 身分の相違といふものは詮方の無いものだ。

(頼朝は尙去らうとする。)

政子 お待ちなさい。何ですつて。

頼朝 (尙獨語のやうに) 源氏は大將軍の家柄だ。北條は伊豆の片隅の田舎武士だ。

政子 北條は桓武天皇の後胤です。平家の一族です。天下の罪人など、は格式が造ひます。

頼朝 なに、天下の罪人？

(頼朝は思はず聲をあらゝげて、政子の方へ突進する。が、政子は俄かに冷静な態度に變つて笑つて居る。暫らく間。頼朝は手にした戀文をびり〜と引裂きながら、政子を見つめて居る。と、その紙片はいつか双手の間から落ち散つて居る。)

頼朝 あなたは全くわたしの理想の婦人だ。頼朝改めて御詫をします。

政子 (尙冷笑をつゞけて) また御得意の御世辭ですか。

頼朝 いや、御世辭どころですか、わたしはもう眞劍以上です。正直に告白すれば、成程わたしには、強ひて婦人の歡心を買はうとする悪い癖があつた様な氣がします。併しわたしの古い其缺點は、其儘文字に現はした此手紙と一緒に、此通り引ちぎつて、踏みにじつてしまひました。(紙片を踏みにじる) さあ、新らしく蘇つた此頼朝に同情して下さい。

(頼朝は政子の兩手を堅くにぎる。政子は驚いて手を振はらふことも出来ない。)

政子 でも、父が二人の戀を許して呉れなかつたら如何します。

頼朝 あなたに千人の繼母があつて、阿父さまのお心をどんなに動かさうと、わたしにはそんな事は、もう何でもありません。如斯してあなたを、わたしの宿所へ連れて行くだけの事です。

(と、政子の手を握つたまゝ、引摺つて行かうとする。政子は其手を振はなして)

政子 いけません、いけません。あなたは人違ひをして居らつしやるのです。

頼朝 人違ひですつて。(笑つて) もうそんな事ぐらゐで胡麻化されるものですか。

政子 でもわたしは、あなたの考へてゐらつしやる牧子ではございませぬよ。

頼朝 (思はず手を放して) な、何ですつて。で、では、あなたは誰なのです。

政子 (笑つて) 誰だか、お分りにならない?

頼朝 (少し困つて) それお分りますとも、あ、あなたはお姉さまです、政子姫です、

政子 (尙笑つて) さあ、如何ですか。

頼朝 いえ、あなたは確かに政子姫です。政子さんです。若しさうでなかつたら……

政子 こんな御轉婆な筈はないと仰有りたいのでせう。でも、矢張わたしが妹の牧子でしたら……

頼朝 (尙心に迷ひながらも、強て勇氣を示して) もうそんな事などは如何でも構ひませぬ。あなたがあなた

でさへ有つたら、それが姉さんであらうが、妹さんであらうが、縦令伊東入道の娘でも、清盛の孫

でも、わたしは喜んで結婚します。あなたこそはわたしが求めてく求め抜いて居た理想の妻なのですからね。

政子 まあ、能くしらへしくそんな嘘が云へますのね。あなたは日本一の嘘つきね。

頼朝 さあ、あなたの御弟子位にはなれるかも知れませぬね。

政子 まあ。

頼朝 兎に角其點についても、あなたは鬼の女房に鬼神です。どうぞわたしを扶けて、わたしの事業を成功させて下さい。

政子 あなたの事業？

頼朝 (四邊を見て政子の手を握りながら聲を潜めて) 平家を倒して、天下を此四つの手に握る大事業です。

政子 (じつと頼朝の顔を見て、さてその目を手に落し) この四つの手に。

頼朝 十三の年に此伊豆の國へ流されて來て以來、二十年の間たゞの一瞬間も忘れた事の無いわたしの希望です。あなたが助けて下されば、屹度成功します。どうぞくわたしの願ひを適へて下さい。

政子 でも、あなたはたつた今、清盛の孫とでも結婚すると仰有つたぢや有りませぬか。それで平家が倒せますか。

頼朝 それは譬諭です。あなたがほんたうに清盛の孫だつたら、誰があんな事をいふものですか。

政子 だから、あなたは嘘つきだといふのです。

頼朝 え、

政子 それに北條は平家です。父は平家の家來です。

頼朝 (すつかり閉口して) 成程、あなたは意地が悪い……

政子 どうせ、妹のやうにやさしくは有りません。

頼朝 (苦笑して) あなたはその復讐のためにそんなに執拗しつこくわたしをお窘めなさるのですね。併しわた

しにはあなたに反抗する力は有りません。どんなにでも宥めていただきませう。

政子 (さすがに氣の毒になつて) あなた、ほんたうに後悔なすつて。

頼朝 (萎れて) この通りです。

政子 では同情して上げませうかね。その代りあなたわたしに約束が出来て。

頼朝 (急に元氣を回復して) え、く、どんな約束でも。

政子 ではね、將來決して他の婦人に關係しないといふ……

頼朝 わけも無い事です。氏神の八幡大菩薩は勿論、三島、箱根、伊豆山の大権現達も證人に頼みませう。

政子 たしかに。

頼朝 無談です。

政子 (決心して) 父や母が何と云はうと、わたしは次の世までもあなたのものです。

頼朝 兵衛佐源頼朝、心から御禮を申します。

(頼朝は政子の手を取る。政子は心から恥かしさうに顔をそらしたが、急にわれに返つて)

政子 あなた〜。

頼朝 え。

政子 何時、平家追討の旗上げをなさるの。

頼朝 (周章をくつて) 如何も氣が早や過ぎますね。今やつと貴女と妥協が成立つた計ぢやありませんか。

政子 今度はそろ〜父の方をつけやうと仰有るの。

頼朝 いや、決して、そ、そんな……

政子 (笑つて) 父や弟はわたしが勧めて、屹度源氏の御味方をさせますわ。

頼朝 もう結婚政略は望みません。

政子 そんなに遠慮しなくとも大丈夫よ。(頼朝の方へ寄らうとして上手を見る。) あら、妹が……

頼朝 (稍狼狽して) あ、あの方が妹さんですか。妹さんはわたしの手紙を御覽になつたのですか。

政子 見ましたとも、妹へおよこしになつた戀文ですもの。

頼朝 そいつは困つたな。如何しませう。

政子 (笑つて) まあ、わたしが何とか致しませう。あなたは早くお逃げなさい。

頼朝 ではまた。

政子 また明日ね。

(頼朝は心を残して、来た道へと引かへす。政子姫はその後姿を見送る。牧子姫は上手より出で来る。)

牧子 お姉さま、あの人はもう歸りましたの。

政子 (やゝうつとりとして) あの人？

牧子 あの頼朝は。

政子 頼朝はね。

牧子 矢張色魔なの？

政子 あゝ、恐ろしい色魔よ。

牧子 でも、如何なすつて。

政子 (こみ上げ来る笑ひを壓殺しながら) わたしたうとう誘惑されてしまつたの。

牧子 まあ。

(牧子姫は呆れたる面色。政子姫は心の底より迸り出る幸福の感を、推隠すべく苦心する。落花、鶯の聲。)

大正十四年二月一日印刷  
 大正十五年八月一日再版  
 大正十五年八月五日再版發行

現代戲曲全集  
 第三卷



著者

發行者

印刷者

印刷所

發行所

(非賣品)

松居松翁  
 高安月  
 山崎紫  
 伊原青々  
 岡鬼太郎園紅

東京市麴町區內幸町一丁目六番地

中塚榮次郎

東京市下谷區二長町一番地

守岡功

東京市下谷區二長町一番地

凸版印刷株式會社

東京市麴町區內幸町一丁目六番地

國民圖書株式會社

電話銀座二一八八番  
 振替東京五二二九八番